

聖書：使徒6：1～7

説教題：神のことばをあと回しにせず

日時：2013年8月11日

2章で聖霊の注ぎを受け、豊かな祝福に歩み始めた新約の教会。その教会に問題が次から次へと生じたことを私たちは見て来ました。まずペテロとヨハネが捕らえられ、ユダヤの最高議会で尋問されるという迫害が起きました。またアナニヤとサツピラの偽善という教会内部からの問題も起きました。また使徒たちが再びサンヘドリンに捕らえられ、厳しくむちで打たれる出来事も起きました。そして今日の6章では内部から、今度は不満の声が上がります。

今回の問題は、教会の中のギリシャ語を使うユダヤ人とヘブル語を使うユダヤ人との間におけるものです。ギリシャ語を使うユダヤ人とは、その多くが離散のユダヤ人たちで、最近ここに戻って来た人たちです。彼らは世界共通語のギリシャ語を話し、その外国生活を通してギリシャ・ヘレニズム文化の影響を大きく受けていた人たちでした。彼らは自分たちがユダヤ人であるという自覚は強く持ち続けていたものの、世界文化には好意的な見方を持ち、それを生活の中に多に取り入れようとする傾向があったと考えられます。一方のヘブル語を話すユダヤ人とは根っからのユダヤ人で、この地にずっと住み通していた人たちがその大半でした。彼らは先祖伝来の言葉であるヘブル語、アラム語を大切に、それを話すことに誇りを持っていました。ですから当然ギリシャ文化を取り入れることに関しては、積極的ではなかったわけです。彼らが使っている聖書もそれぞれ別々でした。片方は主に七十人訳と呼ばれるギリシャ語訳の聖書を用い、もう一方は元々のヘブル語の聖書を使っていました。

このように言語の違いだけではなく、文化や生活の仕方に対する考え方においても違いがあり、二つのグループの間にはある種の緊張関係があったのです。ギリシャ語を話すユダヤ人からすれば、もう一方の人たちのことを「どうして彼らはもっと最近の文化を取り入れないのか。それは食わず嫌いではないのか。」と思っていたでしょうし、一方のヘブル語を話すユダヤ人からすれば、「あいつらは外国生活が長いために、ヘブル民族の誇りを捨ててしまい、魂が抜かれている。」と見ていたことでしょう。

そんな2種類のユダヤ人同士の緊張関係は、一つの問題をきっかけにして一気に表面化します。1節にあるように、ギリシャ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに苦情を申し立てたのです。その理由は、彼らの内のやもめたちが毎日の配給でなおざりにされていたからです。そこには格差が見られる！と。外国から帰って来たユダヤ人たちが日頃から「どうも我々は外から帰って来たということで軽蔑されているのではないか」というひがんだ感情を持っていたとすれば、その思いも手伝って、より不満な思いが一気に爆発したとも考えられます。

なぜこのような状況が生じたのでしょうか。その背景として1節には「そのころ、弟子たちがふえるにつれて」と記されています。ペンテコステの日に三千人が回心し、4章4節では信じた男の数が五千人ほどになったと記され、5章14節でも「主を信じる者は男も女も益々増えて行った」と記される状況がありました。そんな中で人々の必要のためにささげられたお金は、使徒たちの足もとに置かれていました。全部の作業を使徒たちがしていたのではないに

でも、相変わらず彼らが分配のための責任を担っていたのでしょう。しかし人数が増えて来る中で段々と手が回らなくなり、見過ごされる人たちも出ていたのです。

この苦情が出る中で教会はどうしたでしょうか。使徒たちはこれを聞いて「スミマセン！これからはもっと時間をささげてください。」と言ったのでしょうか。そうではありませんでした。彼らは、自分たちが引き続きこの働きを担ったら、神の言葉を後回しにすることになってしまうと思ったのです。主から与えられた第一の使命が果たせなくなると気づいたのです。ある注解者は、これも教会に対するサタンのおそかな攻撃だと見ます。もし使徒たちがこの苦情に接して、このためにもっと多くの時間とエネルギーを注いだら、神のことばが十分には語られないことになってしまいます。教会の主イエス様が私たちに養ってくださる御言葉が語られないなら、教会は霊的に栄養がなくなり、弱くなってしまいます。そして偽りの教えが混入しても、見分けがつけられなくなってしまいます。そこで使徒たちは「私たちが神のことばを後回しにすることは良くない」と判断したのです。私たちは専ら、祈りと御言葉の奉仕にこそ励まなければならない、と自覚したのです。

しかし使徒たちは、配給のわざから手を引こうとは言いませんでした。使徒たちの言葉から分かることは、愛の働きも教会から欠けてはならないということです。教会はみことばの宣教とセットで愛とあわれみの働きも行なうのです。そこで新しい役員を選出し、その人々に食卓に関する働きを担ってもらうことを提案したのです。

ここで選ばれたのはどういう人たちでしょう。一般にここは「執事」の選出が記されている箇所と言われます。しかしここに「執事」という言葉、「ディアコノス」は出て来ません。似たディアコニアという言葉は出て来ますが、それは4節で使徒たちの働きを指して使われています。また後の使徒の働き21章8節でも、この人々のことが「あの七人」と呼ばれ続けており、執事とは言われていません。ですからこれは将来の執事職と関係する側面があるとしても、それとイコールではなく、むしろこの時代のエルサレム教会の必要のために立てられたリーダーたちだったと言えます。

そして役職名より大切なことは、ここに示されている原理です。それは教会の様々な働きは様々な人で担うということです。神は一人一人に異なる召命と賜物を与えています。ですから祈りと御言葉の奉仕に召されている人は、それに専心する。また他の働きのためには神がそのための働き人を備えておられます。Iコリント12章27節：「あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとは各器官なのです。」一人の人が、あるいは少数の人が教会の働きを担うのではなく、それぞれが神の召しを受け止めて、その働きを担うこと。その原理が示されています。

さてこうして教会は新しい役員を選出することへと向かいます。まず使徒たちはその資質について3節で述べます。一つ目は「御霊に満ちた人」。御霊は私たちにキリストを示し、キリストの栄光を現わす方ですから、御霊に満たされた人とはキリストを良く知り、キリストを愛し、キリストから来る力によって生き生きと歩んでいる人でしょう。二つ目の資質は「知恵に満ちた人」。これは御霊による知恵のことでしょう。この働きにつく人は、すでに苦情が出されている状況の中で適切に分配し、導く人でなければなりません。ですから知恵ある人でなければならないのです。三つ目の資質は「評判の良い人たち」。御霊に満たされている人は独り

善がりの人でなく、周りの人々からも良い評価をされる人です。また人々にこれから分配する奉仕をする上で、えこひいきしていると思われたいのためにも、評判の良い人でなければならなかったのでしょう。

そして選挙が行なわれます。3節と5節から分かることは、この選挙は会衆によってなされたということです。今日の私たちの教会でも長老や執事の選挙は会衆によってなされます。しかし間違っていないのは、会衆によって選ばれるからと言って、選ばれた人は会衆から権威を授けられるのではないということです。会衆の方に力があって、選ばれた人は会衆に責任を負い、会衆に従わなければならないのではない。それだといわゆる民主主義になってしまいます。しかし教会は民が主ではなく、神が主です。あえて言えば神主義です。選挙は誰が神が備えたもう器であるかを明らかにする神の手段です。ですから会衆は単なる人気投票をするのではなく、神が立てている器は誰であるかを祈りの内に判断し、投票しなければなりません。そして選ばれた人は選挙という方法を通して神によって立てられたことを受け止め、神に責任を負うのです。会衆の顔色を伺って奉仕するのではなく、時に会衆の反対にあったとしても、神に良き報告をするように仕えるのです。

この選挙の結果、7人が選ばれます。すなわちステパノ、ピリポ、プロコル、ニカノル、テモン、パルメナ、アンテオケの会衆者ニコラオ。この中の筆頭者ステパノは次回から大きな活躍をし、キリスト教会最初の殉教者となる人です。また2番目のピリポは伝道者として、この後、用いられる人です。その後の5人については聖書からはよく分かりません。使徒たちはこれらの人々に祈って手を置き、神のさらなる祝福を願って任職します。

この結果はどうだったでしょう。7節：「こうして神のことばは、ますます広まって行き、エルサレムで、弟子の数が非常にふえて行った。」神のことばが語られることを大切にしたり、神のことばは益々広まり、信じる人が増えて行きました。ここに示されていることは神のことばを後回しにしないことが祝福のカギであるということです。そしてもちろんこれは、御言葉の働きとセットであわれみの働きも継続的に、力強くなされたからでしょう。7節最後には「そして、多くの祭司たちが次々に信仰に入った。」とあります。祭司たちがこのように信仰に入ったことは、神の特別な祝福であり、教会にとっては大きな励まし、また当時の社会には大きなインパクトを与えた現象だったでしょう。

以上の箇所から私たちは自分にどう適用すべきでしょうか。それは何と言っても今日の説教題の通り、「神のことばを後回しにしない」ということでしょう。私たちの生活にも様々な必要があります。それらは私たちの生活にみな欠かせないことですが、私たちはともするとそれらに振り回されて、神のことばを後回しにする誘惑があります。しかしそれはサタンの思う壺です。私たちはこの神のことばを第一に持って来ることなしに祝福はないことを今日の箇所から学びます。それは個人の生活においてもそうでしょう。たくさんのすべきことがあります。その中でやはり、神のことばを後回しにしない。使徒の働き 20章 32節：「いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとに委ねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあつて御国を受け継がせることができるのです。」私たちはみことばを通して、自分が持っていなかった上からの力、神がキリストにおいて備えてくださった恵みと力に導かれて歩めるのです。これを欠いたら一切の力は失われてしまいます。そして

これは今日の箇所が述べるように、教会において大切に考えられるべきことです。教会も色々なことをしようと考えるかもしれませんが、周りからもそう期待されるかもしれませんが。しかし神のことばが後回しにされてはならないのです。この務めが第一に高く掲げられなければなりませんし、このみことばが語られる時を最も大切な時とすべきなのです。ここに教会の命があるのです。

そしてこれとセットで今日の箇所から確認することは、今のことを強調するあまり、愛の働きが疎かになってはならないということです。この二つはセットであり、車の両輪です。使徒たちは決して愛とあわれみの働きを切り捨てるべきものとはしませんでした。むしろこの働きが力強くなされるために、神の器を見出し、教会として取り組み続けました。この両者の働きをもって、教会は祝福され、前進したのです。私たちもこのことを学んで、自らの信仰生活、教会生活に当てはめたいと思います。みことばが祈りをもってしっかり語られること、これを教会の特別に大切な働きとして高く掲げること。またそのみことばに生かされている者として愛の働きをもなすこと。ことばや口先だけでなく、行ないと真実をもって主を証しすること。このことを通して、私たちも神のさらなる祝福にあずかってまいりたいと思います。